

令和六年度卒業式 在校生送辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして保護者の皆様、ご子息の卒業、誠におめでとうございます。衷心よりお慶び申し上げます。この卒業式という場で、一番尊敬する先輩方である九十九期生の方々に送辞を申し上げられること、光栄に思います。在校生を代表してお祝いの言葉を述べさせていただきます。

僕たちから見た先輩方の印象は、もちろん一つの言葉では表せません。いま、背広や袴を着た百七十余人の先輩方のお姿を、そしてお顔を拝見しても、皆さん一人一人違うことを考えていらっしゃるように思います。まさに「十人十色」です。けれど、共通点として一つ申し上げるのならば、「やるときはやる」ということでしょうか。どれだけ遊んでいても、どれだけふざけていても、やるべき時はきちんとやる、そんな先輩方の姿が、いまでもまぶたに焼き付いています。

九十九期生の皆さんは、当然、僕らの一年上の学年、すなわち、だいたい一つしか年齢は変わりません。ですが、僕らの中で、先輩方は、どれだけ偉大で、どれだけ大きな存在であったことか。すぐ近くにいるはずなのに、どれだけ手の届かない遠い存在であったか。一年という差が、とても超えられない壁のように感じられます。先輩方は、私たちから見ると、手の届かない、超えられない壁のような存在でありながらも、かっこいい憧れの存在でもありました。そんな先輩方の背中を追いかけて、僕らはここまで歩んできました。先輩方の存在なくして、私たちの成長はありませんでした。

九十九期生の皆さんの武蔵での六年間に触れるには、不本意ながらも、かの新型コロナウイルス感染症に触れずにはいられません。学校行事は特に影響を受けたことと思います。ですが、そんなイレギュラーな場面でも、制限がある中でも、先輩方はその障壁を乗り越えて、三人行事を、いわゆる「コロナ前」の状態に戻してくださいました。先輩方は、紡がれてきた歴史を守り、私たち後輩へつないでくださったのです。僕たちも、先輩方と同様に歴史をつないでいきます。そのやり方は、先輩方の姿を間近で見て、すでに学ばせていただいております。

高校二年の我々をはじめ、私たちが在校生は、九十九期生の皆さんにたくさんお世話になりました。部活動や委員会活動は言うまでもなく、そのほかたくさんの方々の場所、たくさんの方のことを皆さんから学ばせていただきました。感謝してもしきれない次第です。

時間というのは、ときに残酷です。つい先日まで武蔵で、僕らのすぐ近くで過ごしていたはずの先輩方は、もうすぐこの学び舎を飛び立ってしまいます。しかし、別れがあるというのは、出会いがあるということ、その逆も然うであります。先輩方は、この武蔵高等学校を卒業すれば、新たに人と出会うでしょう。けれど、この武蔵での友達や過ごしてきた時間は、かけがえのない思い出として先輩方一人一人の胸の中に残り続けます。

僕はもっとたくさんの方々の思いをお伝えしたいのですが、間もなくこの送辞を締めくくらなければいけません。あと少しで、この学校から皆さんが去ってしまうこと、惜別の念に堪えません。

ですが、最後に伝えさせてください。武蔵は永遠に皆さんの母校です。そして、皆さんは永久に武蔵生です。記念祭やホームカミングデーの日には、いえ、何もない日にも、遊びに来てください。僕たち在校生や、先生方、そしてやぎたちはいつでも待っています。

それでは、先輩方の、今後の輝かしい未来とご健康を心から祈念し、果てしない感謝と痛惜の念を込めて、次の一言を以て私からの送辞とさせていただきます。

さようなら、ではなく、いつてらっしゃい！

令和七年三月十八日

在校生代表 高等学校二年 鬼頭 幸市